

戒められた有賀先生の言葉が、ふと、心に浮んだ。それというのも、どうもこの原稿が村研礼讃になりかねないからである。

今『研究通信』の最近号を二、三翻返しているが、「発足当時にみられたあの心あたたまる同志的結合を再現し」、「温泉につかりながら、報告会での議論を延長させて話の花を咲かせ、お互に深になつて親交を深くし、「お互にゆづくり話しあえなかつたらうらみを本年の大会では一挙にとりもどしたい」という願いは、終始晴天に恵まれ、安直と気楽なのがとりえの農民の家で行われたことで親いられたのではないかと思う。

少くともチスト・ケースとしても、五年越の、それこそ泊り込みで研究会を持ちたいといふ共同課題は立派に果されたと思う。同時に村研の歩みに大きな足跡を残す程の本年の大会の成功は、会員の熱意と勘進元、事務局の尽力の賜物であるばかりではなく、村研の今後の発展に大きく寄与することと信する。九州から遙々、そこそ馳参した私にも、私なりに啓發され、得るところが大きかつたと思つてゐる。

お前の期待していたものが貧弱だったのだ、と言わればそれ迄の話であるが、私の期待を遥かに超える盛會であつたと思つてゐる。さて、共同討議の際、一応済んだ事になつていた筈の、川崎市の事例に関する共同体の論議が休憩後蘇返された感があつたが、あれは私にとっては望むところであつたのだ。討論の成果を抱ぐべきではない、巻返し、次

鳴子から帰つて

(福岡) 原 宏

しんらつきを失い、村研礼讃になることを

しは決して無意味ではない。

「アラ」といわれる程の集団的産地、鳴子」。

私は社会学で使う共同体的規制という用語を、ムラの研究に適用することには、今でも多少のためらいを感じている。それは、「研密通信」二九号で、中村先生が太石慎三郎氏の共同体の規定を取上げて述べておられる「は、さすがに見惚れするばかりであった。ハ、この程度の規定では具体的とはいえないだろ。メコミの首は廻せばキイキイと鳴り、調は太う」という考へに率直に従う心にも繋がつてゐる。それは更に、社会学者は経済学と経済史学との識別をもつと明確にした発言をすべきであるという気持にも通じているからである。日本の政治に日本むらを研究するには、日本の政治に貫している基本的性格としての、政治構造と家制度との結びつき、更に神社寺院とそれらとのつながりというものを忘れることが出来ない。私は村研究年報三集の有賀、中村両先生の論文を今又読み返しているし、今井林太郎・八木哲治氏の『封建社会の農村構造』の中でも、近世上瓦林村における役人制と官産とを標点とする共同体の考察（第三篇）はとりわけ興味深く読んだ。

最近、先学の研究成果をひもときながら律令時代の国司（國府）惣社、國分寺等の所謂政教一致の法制からぬめて、社寺が支配体制に組み込まれる過程を、具体的に私なりに勉強しようと思つて、稍過史的に（極めて初步的なことははあるが）覚書帳をつくつてゐる。

余り手前勝手な事ばかり書いたついでに、鳴子の思い出を語くことにしたい。

湯治とこけしの町、南北のこけし産地中

私は東北大学の木下研究室の東氏の案内で、者鶴高進を訪れた。翌日は喜多野先生のお供をして、高龜から更に二、三軒廻つた。名工の作品を手描き。株元と桜を赤と緑のロクロ線で引絵められている。そして眼を奪うばかりの美しさの中に、清楚の香を心憎いまでに覺えさせる眼とほん。今は既にこけし焼きを焼めている松一（松三郎翁の子）の旧作を入手することも出来た。これが本当に大も歩けば種に当るということだろう。